



天曜文庫

親鳥餘情才九 冷標 蓬生 閑屋

十一 冷標

小奇 為卷 若源氏君廿七歳八月廿日
廿八歳八月廿日 廿九歳八月廿日 卅歳八月廿日
卅一歳八月廿日 卅二歳八月廿日 卅三歳八月廿日

こやうかたし 信一 夢れら 院のいふと 以
源氏の故院と 小奇のいふ 院のいふと 以
卷のいふと 寛平のいふ 院のいふと 以
九月甲辰依止 有波のいふ 院のいふと 以
は先帝の仁 和沙のいふと 以

らのたゞ一移政一終ふ

天皇御元服のころもこの切年時の
移政の事とては後辟の表とてなかつた
てゑも政の如くはなかつた移政と
わがたへて用ひて梅とて金泉院十丁と
の元服の事とてはなかつた移政と
太子元服の事とてはなかつた移政の例と
法和天皇貞觀六年の元服の同年
の月忠仁公良房移政の詔とてはなかつた例
准との事とてはなかつた移政の例

よんめつりてはなかつた

人の國の時つらつと移政の事とてはなかつた

漢高祖其丈人の電とてはなかつた超王
如意とてはなかつた移政の事とてはなかつた
の移政の事とてはなかつた移政の事とてはなかつた
法和天皇の事とてはなかつた移政の事とてはなかつた
はなかつた移政の事とてはなかつた移政の事とてはなかつた
の移政の事とてはなかつた移政の事とてはなかつた
帝の事とてはなかつた移政の事とてはなかつた
事とてはなかつた移政の事とてはなかつた

そらほこころひしむら君し

柳巻よほり紅梅を去住のまぢから

大よのしむら君

大層よのわのいよとまあ君ら
もや中はも大周と大のささ
ほほいよいよいよいよいよ
折返大返大長年いよいよ
事し程あるいよいよいよ
りりりりりりりりりりりり

好境よのいよいよいよいよ

宣旨の若ふよの折返を
院のいよいよいよいよ
よの若和歌集の中

あはれしむらあはれしむら

あはれしむらあはれしむら
あはれしむらあはれしむら
あはれしむらあはれしむら
あはれしむらあはれしむら

あはれしむらあはれしむら
あはれしむらあはれしむら
あはれしむらあはれしむら

あつたてのついでに
りあつたてのついでに
もつたてのついでに

受領よりかきかへりて
ついでに
ついでに

大上天皇よりかきかへりて
女院よりかきかへりて
小上天皇よりかきかへりて
ついでに

ついでに
封戸も三宮の若干
ついでに
院方よりかきかへりて

聖人十人

十引の東村の舞人十人
馬の舞人十人
馬の舞人十人
馬の舞人十人
馬の舞人十人
馬の舞人十人
馬の舞人十人
馬の舞人十人

凡右近衛府生各一人近衛者之為身
但傳童子之介案之流身也
從ひて是すのむすむす
凡て其蒙東に其母亦平
と云ふ一書に云ふ一書に云ふ
ちやふと云ふ一書に云ふ
かろ難授しるは流と御堂殿の
かゝる一書に云ふ一書に云ふ
か井に云ふ
人の心は云ふ一書に云ふ

凡て其蒙東に其母亦平
と云ふ一書に云ふ一書に云ふ
ちやふと云ふ一書に云ふ
かろ難授しるは流と御堂殿の
かゝる一書に云ふ一書に云ふ
か井に云ふ
人の心は云ふ一書に云ふ
凡て其蒙東に其母亦平
と云ふ一書に云ふ一書に云ふ
ちやふと云ふ一書に云ふ
かろ難授しるは流と御堂殿の
かゝる一書に云ふ一書に云ふ
か井に云ふ
人の心は云ふ一書に云ふ

冷泉院御信より行へし母後より
しゆらけりしとておの并に宮の御
つらひにけりし
くははらけりしとておの并に宮の御
つらひにけりし

第一降生

小詞并尋為卷石守に横のまに源氏
廿七歳

しゆらけりしとておの并に宮の御
つらひにけりし
富家源掃也と東坡の詩
くははらけりしとておの并に宮の御
つらひにけりし
大将殿の御信より行へし母後より
しゆらけりしとておの并に宮の御
つらひにけりし
くははらけりしとておの并に宮の御
つらひにけりし

あつたのほかにいふ事はない

東捕のついでに、あつたは、あつた

あつたは、あつたは、あつたは

あつたは、あつたは

あつたは、あつたは、あつたは

あつたは、あつたは、あつたは

あつたは、あつたは

あつたは、あつたは、あつたは

あつたは、あつたは、あつたは

あつたは、あつたは、あつたは

あつたは、あつたは

あつたは、あつたは

あつたは、あつたは、あつたは

あつたは、あつたは

あつたは、あつたは

あつたは、あつたは、あつたは

あつたは、あつたは、あつたは

あつたは、あつたは、あつたは

あつたは、あつたは

あつたは、あつたは、あつたは

くわんりや

将禊のふさふさふさふさふさふさ
織物のふさふさふさふさふさふさ
ふさふさふさふさふさふさ

ふさふさふさふさふさふさ
ふさふさ

ふさふさふさふさふさふさ
ふさふさふさふさふさふさ

花鳥解情才十 繪合 松風

十二繪合

此詞為卷名後拾遺集の詞よ正子内
親王繪合のふさふさふさふさ
合のふさふさふさふさふさ
君廿歳の時のふさふさふさふさ
九歳のふさふさふさふさふさ
前新宮のふさふさふさふさ
十二歳成給地ふさふさふさふさ
ふさふさふさふさ

くらみらのいばゆりのふんぼと
まじりたま〜ら〜ふんぼのまじり
あつめらつた〜
〜〜のふんぼ

ゆ〜の菅金銀の蒔繪の菅方寸
松の杉枝鶴おと蔭天曆二年者元寔
御膳所おぬい筆者元と〜
お慶の首角おぬい松枝〜
〜と松と松〜
〜のふんぼ

箱〜の箱〜の箱〜

〜の梅枝の巻〜

〜の海

おあ〜の箱〜

〜の箱〜

〜の箱〜

繪合二店おは〜

〜の箱〜

〜の箱〜

〜の箱〜

梅江ののびる平地ののびる

天徳寺合の更衣典侍兼侍合

と方より故の法隆寺の書

ののびるののびる

万葉集の行取花前

物語ののびる

火種

東坡詩云秋暑不知寒火鼠不知暑

ののびる

巨勢相見者金思子と金思寛平時人

為其子則了為舟貫之同時人

ののびるののびる

山内住ののびる

ののびる

ののびる

昔ののびる

ののびるののびる

類聚ののびる

ののびるののびる

ののびるののびる

ついでに

天徳寺谷のた方制浦は種机種葉
机は種也其を今も其方浦は種
器へ種葉は其方浦は種葉
よもよも下は種也其方浦は種
しよもよも下は種也其方浦は種
也よもよも下は種也其方浦は種
天徳のた方制浦は種机種葉
よもよも下は種也其方浦は種
よもよも下は種也其方浦は種

あつた井のた方制浦は種机種葉
あつた井のた方制浦は種机種葉
あつた井のた方制浦は種机種葉
あつた井のた方制浦は種机種葉
あつた井のた方制浦は種机種葉
あつた井のた方制浦は種机種葉
あつた井のた方制浦は種机種葉
あつた井のた方制浦は種机種葉
あつた井のた方制浦は種机種葉
あつた井のた方制浦は種机種葉

天徳寺谷のた方制浦は種机種葉
機は種也其を今も其方浦は種
器へ種葉は其方浦は種葉
よもよも下は種也其方浦は種
しよもよも下は種也其方浦は種
也よもよも下は種也其方浦は種
天徳のた方制浦は種机種葉
よもよも下は種也其方浦は種
よもよも下は種也其方浦は種

らかきくはなすはなはな
えすかきくはなはなはな
はなはなはなはなはな
のあはれのいもれ錦とわねひたを
とねはなはなはなはなはな
はなはなはなはなはなはな
よはなはなはなはなはな
もはなはなはなはなはな
はなはなはなはなはなはな
はなはなはなはなはなはな

はなはなはなはなはなはな
はなはなはなはなはなはな

わはなはなはなはなはなはな
のほはなはなはなはなはな
うはなはなはなはなはなはな
はなはなはなはなはなはな
の錦はなはなはなはなはな
はなはなはなはなはなはな
うはなはなはなはなはなはな
はなはなはなはなはなはな

と君とてはあはれなるものぞ
よからしむ

あはれなるものぞあはれなるものぞ
とえはせしむる物なりと

彼ははらへしむるものぞ
なほなるものぞ

あはれなるものぞあはれなるものぞ
よからしむるものぞ

あはれなるものぞあはれなるものぞ
よからしむるものぞ

拾遺中の詞を信義なるものぞ
よからしむるものぞ

あはれなるものぞあはれなるものぞ
朝餉のやせし障子とあはれなるものぞ

よからしむるものぞ
あはれなるものぞ

事合の首指とくははらへしむるものぞ
金銀藤指と別撰よからしむるものぞ

あはれなるものぞあはれなるものぞ
よからしむるものぞ

天徳方合た猪肩丸

業一とゆみちと暮らひのめし

基の東坡もとる徳の二ふり

みちのたつ物とていふ

源氏君は祐道祐親とていふ

源氏の二せつ源氏小造大信の例

とて後ていふ

おとこいふいふいふい

御殿中へいふいふいふ

月いふいふいふい

あんのけいこ

李部王記永平四年新膏舎勅書

司之祿唯作云御平桑良之方為記書

司則取柁女左置之御前之次重物合

のたついふいふ御遊ゆり書目いふ

官の品に和琴とゆいふいふい

とていふいふいふいふい

とていふいふいふいふい

とていふいふい

は將よいふいふい

物音すうりといひ年一とあり

これの時よりとす清の人のいふよし

あつたといふよし喜天曆の聖人の

あつたといふよし天曆の聖人の

あつたといふよし天曆の聖人の

の御奇合といふ事也

十三松風

小詞并奇為卷若源氏廿歳のも

はり清合同年より

と改りわりてとんぬらむとけり

河海の詠あやまらぬとて

二重流の西に對しす

と源氏の流はたつた

けり給ふといふ

ひしと君の流はら中務宮

醍醐王子中務の

河畔号雄飛殿といふ

君は祖也といふ

これより内の御事といふ

そらりといふ

繪卷の巻の末よりこのくわちの堂の
棟梁の思ひすくらの故大徳寺の
南よりさうとて下がくらの棟梁觀の
た大徳寺の山住の後よりさうとて
棟梁寺の堂の法徳寺の棟梁の堂の
堂の法徳寺の堂の法徳寺の堂の
自觀七年の國史よりさうとて法徳寺の
のくわちの堂の法徳寺の堂の
一巻とて二巻のくわちの安買のくわち
民部大捕のくわちのくわち

龜明親王長男伊波中納言二男伊波
俊國と春宮太子の太捕と

くわちの御堂大徳寺の南よりさうとて
殿のくわちのくわちのくわちのくわちの
院と号する院天宮春日園放地院
殿の泉殿とくわちのくわちのくわちの
のり棟梁寺のくわちのくわちのくわちの
とくわちのくわちのくわちのくわちの
のくわちのくわちのくわちのくわちの
のくわちのくわちのくわちのくわちの

ねんじつにせしむるに
あかひにせしむるに
あかひにせしむるに
中一交のり教のり
あかひにせしむるに
あかひにせしむるに

陽成院の母二葉名也
あかひにせしむるに
あかひにせしむるに
あかひにせしむるに

十五権

あかひにせしむるに
あかひにせしむるに
あかひにせしむるに
あかひにせしむるに
あかひにせしむるに
あかひにせしむるに
あかひにせしむるに
あかひにせしむるに

古分草とまじりあつたもの
のまじりあつたもの

十六しや

一、并、朝、高、美、名、源、氏、世、二、歳、の、目
ら、世、の、十、月、廿、八、日、の、事、は、是、を、よ、み、し、ら
せ、し、る、事、は、ま、ま、し、ら、る、事、は、い、は、い、し
天下の豫園の殿とあらたむるは
又、月の変更の事は、あつた事
一、

夏、月、の、法、和、の、天、氣、の、事、也

は、あ、つ、た、事、也

紫、の、み、の、事、は、教、の、所、に、お、か、る、事、也
有、家、の、事、也

は、あ、つ、た、事、也

龍王の子元服の事、は、後、田、下、御、と
源、氏、の、事、は、源、氏、の、同、列、の、事、也
は、故、龍、王、の、子、の、事、也、
は、故、龍、王、の、子、の、事、也、
は、故、龍、王、の、子、の、事、也、
は、故、龍、王、の、子、の、事、也、
は、故、龍、王、の、子、の、事、也、

身は師減神も徳とらり

と書いし事あり

我國のちなりしにたつちなりなる

かやらの政大をたしむる

さやらのつらひ窮者あり 隆目も籍

肉堅窮者ありあまのたはくは富の

衆とて年之つらひるつらひ衆をた

るべき事あり

あはれし事あり

学をたしむるの時又章院の堂にあり

くつらひ若薄ありたしむる(聖廟の堂)

若くは善法ありたしむる(耀とらり)

の事ありたしむる(堂にあり)

と書いし事あり

たしむる事あり(堂にあり)

おもしろき事あり(堂にあり)

さやらのつらひ

たしむる事あり(堂にあり)

かやらのつらひ

あはれし事あり(堂にあり)

生し轉しし譯試の例もあらぬ或は文章
生みしつゝ傳りて方略の試より又いふより
その例は源氏^の言の君の例は例や東
菴院の御幸此次は御試の詩と作り
し及事し終り進まよなるもあはれ侍
従官もほしむる

大學よりり終る

寮試の目録のり

このと書くはしむる

寮試の時長切しと序のりし人

の種姓のりし故に冠する君にさす
との末座のりし終る

源氏よりりしと書くはしむる
也くはなるもいふ

藤原の御中一言のりしと書くはしむる
よき書めと源氏のりしと書くはしむる
あはれしと源氏のりしと書くはしむる
帝王親王の御中一言のりしと書くはしむる
と書くはしむる
と書くはしむる
と書くはしむる

新の歌もつりわがしらへは

なへせんわがしらへは

親の信昌家更家今も冠者の君れあへは

とつたあけの思ふやう大書れ

はあへんあへんあへんあへん

はあへん

あへんあへんあへんあへん

あへんあへんあへんあへん

あへんあへんあへんあへん

醒の字もあへんあへんあへん

雛の物のむもあへんあへん

あへんあへんあへんあへん

あへんあへんあへんあへん

あへんあへんあへんあへん

あへんあへんあへんあへん

あへんあへんあへんあへん

あへんあへんあへんあへん

あへんあへんあへんあへん

あへんあへんあへんあへん

あへんあへんあへんあへん

女節は舞妓入る宮はより〜
〜善相の音見は〜

わあよま〜

〜
〜

あ〜

十一月廿七日舞妓入 武蔵晴年 則有量

節當日の試卯日童女御覽辰日節

會舞妓進舞

あ〜

あ〜

舞妓は装束せ日衣唐衣當日

衣唐衣辰日衣櫛唐衣他日陰鬘

お又青櫛小急也源氏の若女

はるも辰の甲つひあはる

〜
〜

わあ〜

い〜

前女宮陽宗之時に於て

舞院退却時に於て幸濟候程

〜
〜

天長十一年正月二日仁明天皇幸朱雀院

御幸御所同宿謁大后于拍殿見天皇王

御幸御所同宿謁大后于拍殿見天皇王

御幸御所同宿謁大后于拍殿見天皇王

御幸御所同宿謁大后于拍殿見天皇王

御幸御所同宿謁大后于拍殿見天皇王

御幸御所同宿謁大后于拍殿見天皇王

御幸御所同宿謁大后于拍殿見天皇王

御幸御所同宿謁大后于拍殿見天皇王

観る情才十二

玉鬘芳

十七玉鬘芳

はさきいし女巻よ浪事とくたふ瀬流花
 又嵐の三日月も十二月もくれまふら
 かり玉うつれ花の年のれはらうも花
 圓の世さきうららひのりお栗流へむら
 らうい玉うつれ花世にれもいよわ
 くらうい玉うつれ花もいよわ
 や女流へいし花と世七はよはさきみ
 も田とい世のうらう玉うつれ花は詞

つぎはらにらるゝ祖母殿といふこと

松浦がらわりの神を

肥前國松浦郡鏡川村大津宮に
原廣徳の靈也又鏡の神の宮名の所
鏡化して石とて海と鏡とてついで
して鏡の神といふ事とてついで松
浦郡松浦同郡あらつてついでついで
まゝ信水八幡と同様のついでついで
ついでついでついでついでついで
ついでついでついでついでついで

河原を移津國

ついでついでついでついでついで

清のり意かこゝのついでついでついで

より河原のついでついでついでついで

ついでついで

ついでついでついでついでついで

小右記正暦元年の月日名長寺
午時に徳布令更島池の所心志未
御書御詔布北端御明三方村
共者志ついでついで

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or note, consisting of two lines.

Handwritten text in a cursive script, consisting of a single line.

Handwritten text in a cursive script, consisting of a single line.

Handwritten text in a cursive script, consisting of a single line.

Handwritten text in a cursive script, consisting of a single line.

Handwritten text in a cursive script, consisting of a single line.

Handwritten text in a cursive script, consisting of a single line.

Handwritten text in a cursive script, consisting of a single line.

Handwritten text in a cursive script, consisting of a single line.

Handwritten text in a cursive script, consisting of a single line.

花鳥餘情才十三 初子 胡蝶

並一初子

一奇并詞為卷名源氏世六感の心月
つとびのそほりまはれまきの望み
か鏡に望れ並よる

梅のよみをれらのつらひかたきまひく伴
字源佛の作圖こはる也

法華經云梅檀香風悅可衆心
佛國極樂淨土といふ也

らんあつた井らんもらんらんらん

54

Handwritten cursive text, likely a signature or name.

十一日 晴 未用

Handwritten cursive text, possibly a date or entry.

Handwritten cursive text, possibly a date or entry.

Handwritten cursive text, possibly a date or entry.

Handwritten cursive text, possibly a date or entry.

Handwritten cursive text, possibly a date or entry.

Handwritten cursive text, possibly a date or entry.

Handwritten cursive text, possibly a date or entry.

Handwritten cursive text, possibly a date or entry.

Handwritten cursive text, possibly a date or entry.

Handwritten cursive text, possibly a date or entry.

Handwritten cursive text, possibly a date or entry.

Handwritten cursive text, possibly a date or entry.

Handwritten cursive text, possibly a date or entry.

Handwritten cursive text, possibly a date or entry.

Handwritten cursive text, possibly a date or entry.

Handwritten cursive text, possibly a date or entry.

Handwritten cursive text, possibly a date or entry.

事わつたつての金匱と國難の天
元とさつて月男踏つたわしとたつた
縁とさつてお母とつたは縁とさつて
とつたお母とつたお母
お母とつたお母とつたお母とつた
とつたお母と

九傳右無相記美平四年正月十日踏
飯釋水釋被定之中とて飯お宮の水
まの飯釋は大臣の省とて飯右大臣兼
水右大臣將也とて飯と

今案水じよとて男踏つたつたお
踏つたつたつたつたつたつたつた
つたつたつたつたつたつたつたつた
つたつたつたつたつたつたつたつた
踏つたつたつたつたつたつたつた
つたつたつたつたつたつたつたつた
水つたつたつたつたつたつたつた
つたつたつたつたつたつたつたつた
つたつたつたつたつたつたつたつた
つたつたつたつたつたつたつたつた

こゝ酒肴りらるゝ月が水じまやと
つゝ答膳と月を版譯と名づけ給
也又版牧令の水物と舟と名づけ
けられとも譯と名づけられ
ていふ也

わと名れはるゝあつよと
李亨の記遊方人装束
腰袍白下襪着深背持白杖西之装
束抄云と也麴麴鹿袍白下襪半臂白
石帯深履編 靴白杖小あき青袋と

歌の下の
持は二人の腰袍と名とらるゝ
白杖の束と名と持と束と童の深履
と

今葉高か子冠の
あつとらるゝ
下あつとらるゝ
つゝの曲とらるゝ

兼二胡蝶

上詞再尋為卷花初子の周年世の人
細い花の影をうけてはるかに
あはれみよき花の影をうけてはるかに

あはれみよき花の影をうけてはるかに
あはれみよき花の影をうけてはるかに
あはれみよき花の影をうけてはるかに
あはれみよき花の影をうけてはるかに
あはれみよき花の影をうけてはるかに

あはれみよき花の影をうけてはるかに

あはれみよき花の影をうけてはるかに

あはれみよき花の影をうけてはるかに

あはれみよき花の影をうけてはるかに

あはれみよき花の影をうけてはるかに

あはれみよき花の影をうけてはるかに

あはれみよき花の影をうけてはるかに

あはれみよき花の影をうけてはるかに

あはれみよき花の影をうけてはるかに

あはれみよき花の影をうけてはるかに

あはれみよき花の影をうけてはるかに

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 12 lines of dense cursive writing.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 12 lines of dense cursive writing.

一 徳抄の終りてありしつゆ海
終りお慶が終り也

なまのいほそまらむかのびのたのまを
いしり

あし〜いふも〜梅〜まを〜あ
たの月ちんて卯も〜あま
ふよ〜花〜な〜あ〜の〜あ〜あ
大回の松のうろちた〜人相像集に
重之集〜い〜あ〜の〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

物終り〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
松のあ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

花鳥餘情事十回 螢
並三螢

小洞并哥為卷若深皮世共感の月
の事一人望を人

人あつてはさうか

かやうなうたうか

はらへてはさうか
風明認全集の巻末の
こゝろはさうか
はらへてはさうか

いふこと

いふこといふこといふこといふこと

いふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこと

いふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこと

いふこといふこといふこといふこと

いふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこと

いふこと

いふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこと


~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~













おはつておはつて

今葉の海はゆき花草のふもよ

つらつらおはつて

ききかたのききかたのききかたのききかたの

後ろろろ

に海は物語のききかたのききかたの

書ありあつて

ふきかたのききかたのききかたのききかたの

あつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

の源氏とく右大持まゝのあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて



十路 ぬいびり 男女の通稱なり又古人  
の若し磨れ二字を用ふらば  
人よふ文章といふことかきぬりぬ  
いひのちかきぬりぬいひのちかきぬりぬ  
いひのちかきぬりぬいひのちかきぬりぬ  
いひのちかきぬりぬいひのちかきぬりぬ

大いんこ 流女房の中  
執政家といたるいんこぬりぬ  
いひのちかきぬりぬいひのちかきぬりぬ

物心い 愠やいぬいぬい

花鳥餘情第十九抄 常夏 海火 野分  
並 常夏

以詞并 奇為卷 右但詞よりいひぬりぬ  
いひのちかきぬりぬいひのちかきぬりぬ  
いひのちかきぬりぬいひのちかきぬりぬ  
いひのちかきぬりぬいひのちかきぬりぬ

いひのちかきぬりぬいひのちかきぬりぬ  
いひのちかきぬりぬいひのちかきぬりぬ  
いひのちかきぬりぬいひのちかきぬりぬ  
いひのちかきぬりぬいひのちかきぬりぬ



Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of cursive script.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of cursive script. The text includes the phrase "كتاب في" (Book in) and "المعاني" (the meanings).

てのふりかへりて思ふにふりかへりて  
ふりかへりて思ふにふりかへりて  
ふりかへりて思ふにふりかへりて  
ふりかへりて思ふにふりかへりて  
ふりかへりて思ふにふりかへりて

延喜寺院式云々大意一令云々(以下略)

並五 篝火

心洞并奇為卷若

婦氏世六歳の林の初なり人望を重んず

昔の月が似たり

秋の夜をいよひてあけさばあけさば月  
とあけさばいよひてあけさばあけさば月  
あけさばいよひてあけさばあけさば月

並六 野分

心洞為卷り人望を重んず  
又望を重んず

くらきあぐの十坊

まじりひきまのさくらんぼのさくらんぼ  
とらふく——とらふく

あまのたのしみとあまのたのしみ  
くらきあぐの十坊

くらきあぐの十坊

くらきあぐの十坊  
くらきあぐの十坊

くらきあぐの十坊

くらきあぐの十坊

花文後有たふと之後也謝意連う辨云

客後遠方来も我鶴文後と云同ん也

或新明文後やらんむやならん

くらきあぐの十坊

穀の望文がたるともらわらぐ大転回

たはひの記も鴨頭草れ記とら麦

のいゆ——花曲よそむる故

くらきあぐの十坊

くらきあぐの十坊

くらきあぐの十坊

あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに

花鳥餘情事十六抄出 御幸

並七 御幸

公平為卷名大原野御幸  
崇徳十二年の  
二月廿九日  
わび多し  
殿下  
寺部王  
紫東  
以上

寺部王記述長六年大原野御幸共  
紫東  
以上

正袍と着し其外親王の正下みれ  
も父の副服袍とき流下のみえは深  
まりこれ鷹とけりあくの世にふ  
や兼保三年大井の幼きやかの  
とほりしなる

見こもらおとらちの鷹よこし  
はくつらつしきありのよそそ  
り終り

李部王託鷹飼親王の着地摺布衣  
及袴或用は筆末  
蘭色袴 小襦子餅袋

衣類のれい王の鷹飼の装束は布り  
きぬれ摺のふあつとこれ袴は  
わらひにむくはは蘭衣のいふのら  
しきこれけりから襦子下  
あつたかひはよくとせきし  
冠巻縷の冠ときれへに和の芥  
の幼きあひ年中胸を大鷹飼のり  
なよつと文へあつた玉の鷹  
飼はすしなる

う鷹の鷹ふもいしあつたあ

己亥とみえにけしむらゝゝゝ七

昌泰元年十月片取約幸丸方鶴飼着花  
白標也又摺衣右方鶴飼着青白標也又摺  
衣西宮杵云鷹飼也摺符衣袴袴玉帝鶴飼  
青白標袍袴袴玉帝卷縷有下袴着  
劍着有底鞘玉卿鷹飼入野之後着行  
騰解袋 永保三年大井河約幸鶴飼兩  
人鷹飼西人皆雲宮卷縷也又摺衣袴唐  
錦桶腰袴解袋之鷹飼隨身之人錦帽  
子袴衣袴腰縷解袋之以上各具天劍着

帽子今重請衛鷹飼の世業出所所  
不圖又鶴飼と大鷹飼との衣も  
りらや 昌泰元記の青白標と  
赤多より黄標と黄とんすり  
すり青白標と云青とりの  
とや 摺衣より袴の  
わご玉の夢を縷の尉飼の底鞘は  
唐錦桶腰袴は永保元より  
縷と云出衛のより下  
んすり文のいそや











天國古碑  
古碑古碑  
古碑古碑  
古碑古碑  
古碑古碑

古碑古碑

古碑古碑  
古碑古碑  
古碑古碑  
古碑古碑  
古碑古碑













